

斬られたさに

夢野久作

青空文庫

「アツハツハツハツハツ……」

冷めたい、底意地の悪るそうな高笑い、小雨の中の片側松かたがわ原から聞こえて来た。小田原の手前一里足らず。文久三年三月の末に近い暮六つ時であつた。

石月いわつき平馬はフツト立止つた。その邪悪な嘲笑に釣り寄せられるように松の雫しずくに濡れながら近付いて行つた。

黄色い桐油とうゆの旅合羽たびがっばを着た若侍が一人松の間に平伏している。薄暗がりのせいかな襟えりすじ筋が女のように白い。

その前後に二人の鬚武者ひげむしやが立ちはだかつていた。二人とも笠は持たず、浪人らしい古紋付に大髻おおたぶさの裁付袴たっつけばかまである。無む

反りの革柄を押えている横肥りの方が笑つたらしい。

「ハツハツハツ。何も怖い事はない。悪いようにはせんけんでい
所つしよに来さつせえちうたら……」

「関所の抜け道も教えて進ぜるけに……」

「……エツ……」

若侍は一瞬間キツとなつたが臆やがて又ヒツソリと低頭うなだれた。凝じつと
考かへている気配である。

「ハハ。鷹手形にせで関所は抜けられるかも知れんが吾々の眼の下は
潜ひそれんば……のう……」

「そうじゃそうじゃ……のうヨカ稚児ちごどん。そんたは男じゃなか
ろうが……」

「……も……もつての外……」

と若侍は今一度気色ばんだが、又も力なく頭を下げた。隙すきを窺うかがつてゐるようにも見えた。

……フウン。肥後侍かな……。

と平馬は忍び寄りながら考えた。

……いずれにしてもこの崩れかかった時勢が生んだナグレ浪人に違いない。相当腕の立つ奴が二三人で棒組む……弱い武士と見ると左右から近付いて道連れになる。佐幕、勤王、因いんじゆん循じゆん三派のどれにでも共鳴しながら同じ宿に泊る。馳走をするような調子で酒さけ肴さかなを取寄せる上に油断すると女まで呼ぶ。あくる朝はドロンを極めるといふのがこの連中の定おきまり型と聞いた……歎かわし

い奴輩やつどもではある……。

そう考えるうちに若い平馬の腕が唸つて来た。

……自分はお納戸なんど向きのお使番つかいばん馬廻りうままわの家柄……要いらざる事に拘かかり合うまい……。

とも考えたが、気の毒な若侍の姿を見ると、どうしても後あとへ引けなかつた。黒田藩一刀流の指南番、浅川一柳斎の門下随一という自信もあつた。去年の大試合に拝領した藩公の賞美刀なみ、波なみの平た行いらゆき安やすの斬味きれあじ見たさもあつた。

その鼻の先で鬚武者が今一度点頭うなずき合つた。

「サアサア。問答は無益じや無益じや。一所に来たり来たり。アハハ……アハアハ……」

女と侮あなどつたものか二人が前後から立ち寄つて来るのを若侍はサツと払い除のけた。思いもかけぬ敏捷はやさで二三足横に飛んだと思うと、松の蔭から出て来た平馬にバツタリ行き当つた。

「……アツ……」

と叫んだ若侍が刀の柄に手をかけたが、その利腕ほしを掴んだ平馬は、無言のまま背後うしろに押廻おしまわした。二人の浪人と真正面に向い合つた。

「……何者ツ……」

「邪魔しおるかツ」

「名なを名宣れツ」

という殺氣立つた言葉が、身構えた二人の口から迸ほとばしつた。

「ハハ。名宣^{なの}る程の用向きではないが……」

平馬は落付いて笠を脱いだ。若侍も平馬を味方と気付いたらしい。背後^{うしろ}で踏み止まって身構えた。

「委細は聞いた。貴公達が肥後の御仁という事もわかったが、しかし大藩の武士にも似合わぬ見苦しい事をなさるのう……」

「何が見苦しい」

「要らざる事に差出^{さして}て後悔すな」

「ハハ。それは貴公方に云う事じゃ。関所の役人は幕府方と心得るが、貴公方はいつ、徳川の手先になった」

二人はちよつと云い籠められた形になったが、間もなく平馬が、まだ青二才である事に気が付いたらしい。心持ち引いていた片足

を二人ともジリジリと立て直して来た。

「フフフ。武士たる者が松原稼まつばらかせぎをすることは何事か。両刀を手た挟ばさんでいるだけに、非人乞食よりも見苦しいぞ」

平馬がそう云う中うちに、相手はいつとなく左右に離れていた。こ
うした稼うしろぎに慣れ切っているらしく、平馬が持っていた菅笠を、
背後うしろの若侍に渡す僅すきかな隙を見て、同時に颯さつと斬込んで来た。そ
の太刀先には身動きならぬ鋭さがあった。

「……ハツ……」

と若侍が声を呑んだ。その眼の前を、平馬が撥ね上げた茶色の
合羽びょうぶが屏風びょうぶのように遮ったが、それがバツタリと地に落ちた時、
二人の浪人はモウ左右に泳いでいた。切きつ先さきの間に身を翻した平

馬が、一方を右袈裟に、一方を左の後袈裟にかけて一間ばかり飛び退いていた。

俯向けに横倒おしになった二つの死骸の斬口を確かめるかのように、平馬はソロソロと近付いた。それから懐紙を出して刀を拭い納めると、

「このような者に止を刺す迄も御座るまいて……」

と独言を云い云い白い笠を目当に引返して来た。

松の雫の中に立っていた若侍は、平馬に聞こえるほど深いため息をした。

「お怪我は御座いませなんだか」

「イヤ。怪我をする間合いも御座らぬ」

と笑いながら返り血一滴浴びていない全身をかえり見た。

「ありがたい存じます。大望を持つております身の、卑怯とは存じながら逃げる心しんてい底ていでおりましたところ、お手数をかけまして何とも……」

ちやんと考えていたのであろう。若侍がスラスラと礼の言葉を陳べたので、思い上つていた平馬は、すこしうろたえた。

「いや。天晴あつぱれな御心懸け……あッ。これは却かえつて……」

と恐縮しいしい茶合羽と菅笠を受取った。

「お羨うらやましいお手の内で御座いました。お蔭様でこの街道の難儀がなくなりまして……」

「……まことに恥じ入りまするばかり……」

言葉低く語り合ううちに松原を出た。そうして二人ともタツタ今血を見た人間とは思えぬ沈着おちついた態度で、街道の傍わきに立止まつた。

明るい処で向い合つてみると又、一段と水際立みずぎわだつた若侍であった。外八文字に踏ふみ開ひらいた姿が、スツキリしているばかりではない。錦絵の役者振りの一種の妖気を冴え返らせたような眼鼻立ち、口元……夕闇にほのめく蘭麝らんじやのかおり……血を見て臆せぬ今の度胸を見届けなかつたならば、平馬とても女かと疑つたであらう。

その若侍は静かに街道の前後を見まわしながら、黄色い桐油合羽の前を解いた。ツカツカと平馬の前に進み寄つて、恭々しく、

頭を下げた。

「……手前ことは江戸、下六番町に住居致しまする友川三郎兵衛え次男、三次郎矩行のりゆきと申す未熟者……江戸勤番の武士に父を討たれまして、病弱の兄に代つて父の無念を晴らしに参りまする途中、思いもかけませぬ御力添えを……」

「ああいやいや……」

平馬は非道ひどく赤面しながら手をあげた。

「……その御会釈ごえしやくは分に過ぎます。申もうしお後くれましたが拙者は筑前黒田藩の石月と申す……」

「……あの……黒田藩の……石月様……」

といううちに若侍は顔を上げて、平馬の顔をチラリと見た。し

かし平馬は何の気も付かずに、心安くうなずいた。

「さようさよう。平馬と申す無調法者。御方角にお見えの節は、

お立寄り下されい」

かたじけ

「忝かたじけのう存じます。何分ともに……」

若侍は又も、いよいよていちょう町重ていちょうに頭を下げた。

「……何はともあれこのままにては不本意に存じまするゆえ、御迷惑ながら小田原の宿しゆくまで、お伴仰せ付けられまして……」

「ああ……イヤイヤ。その御配慮は御無用御無用。実は主命を帯びて帰国を急ぎまするもの……お志は千万かたじけ忝かたじけのうは御座るが……」

「……御ごもつと尤も……御尤も千万とは存じますが、このままお別

れ申してはいつ、御恩返し……」

「アハハ。御恩などと仰せられては痛み入ります……平に平に……」

「……それでは、あの……余りに御情のう……おなじ御方角に参りまする者を……」

「申もうしわけ 訳 御座らぬが、お許し下されい。……それとも又、関所の筋道に御懸念でも御座るかの……慮外なお尋ね事じゃが……」

「ハツ。返す返すの御親切……関所の手形は仇討あだうちの免状と共々に確しかと所持致しております。讐仇かたきの生しょうこく国、苗字は申上げかねまするが、御免状とお手形だけならば只今にもお眼に……」

「ああイヤイヤ。御所持ならば懸念はない。御政道の折合わぬこの節に仇討あだうちとは御殊勝な御心掛け、ただただ感服いたす。息災

に御本望を遂げられない。イヤ。さらば……さらば……」

平馬は振切るようにして若侍と別れた。物を云えば云う程、眼に付いて来る若侍の妖あでやか艶やかさに、気味が悪るくなつた体ていで、スタと自慢の健脚を運んだ。振り返りたいのを、やつと我慢しながら考えた。

……ハテ妙な者に出合うたわい。匂い袋なんぞを持っているけに、たわいもない柔弱者かと思うと、油断のない体たいの構え、足の配り……ことに彼の胆きもたま玉と弁舌が、年頃と釣合わぬところが奇妙じゃ。……真逆まさかに街道の狐でもあるまいが……。

などと考えて行くうちに大粒になった雨に気が付いて、笠ひもの紐ひもをシツカリと締上げた。

……いや……これは不覚じやったぞ。「武士もののふは道に心を残すまじ。草葉の露に足を濡らさじ」か……。ヤレヤレ……早よう小田原に着いて一盞いっさん傾けよう。

刀の手入を済ましてから宿の湯に這はい入ってサバサバとなった平馬は、浴衣ゆかたがけのまま二階に上ろうとすると、待ち構えていたらしい宿の女中が、横合よこあいから出て来て小腰こがを屈めた。

「……おお……よい湯じやったぞ……」

「おそれ入ります。あの……まことに何で御座いますが、あちらのお部屋が片付きましたから、どうぞお越しを……」

「ハハア。身共は二階でよいのじやが……別に苦情を申した覚えはないのじやが……」

「……ハイ……あのう……主人の申付もうしつけで御座いました……」

「……そうか。それならば余儀ない」

平馬は鳥渡ちよつと、妙に考えたがそのまま、女に跟ついて行った。女

中は本降になつた外廊下を抜けて、女竹めだけに囲まれた離座敷はなれざしきに案内した。

十畳と八畳の結構な二間に、備後表びんごおもてが青々して、一間半の畳

床には蝦夷菊えぞぎくを盛上げた青磁の壺が据えてある。その向うに文ぶんち

晁ようの滝の大幅。黒ずんだ狩野派の銀屏風ぎんびょうぶの前には二枚襲かさねの

座布団。脇息。鍋島火鉢。その前に朱塗の高膳と二の膳が並べて

ある。衣桁いこうにかかった平馬自身の手織紬ておりつむぎの衣類だけが見すばら

しい。

お小姓上りだけに多少眼の見える平馬は、浴衣がけのまま、敷居際で立止まった。

「……これこれ女……」

女は絹行燈きぬあんどんの火を掻立てながら振返った。

「そちどもは客筋を見損なつてはいやらぬか。ハハハ……身共は始終、この辺を往来致す者……斯かよう様な部屋に泊る客ではないがのう……」

「ハイ……あの……」

女は真赤になつて行燈あんどんの傍わきに三指を突いた。

「……まこと……主人の申付けか……」

「……あの。貴方様が只今お湯に召うちします中に、お若いお武家様

が表に御立寄りなされまして……」

「……何……若い侍が……」

「ハイ。あのう……お眼に掛つて御挨拶致したい筋合いなれど、先を急ぎまする故、失礼致しまする。万事粗略のないようにと仰せられました、私共にまで御心付けを……」

「……へへい。只今はどうも……飛んだ失礼を……まっぴら真平、御免下されまして……」

五十ばかりの亭主と見える男が、走つて来て平馬の足元に額を擦り付けた。

「……また只今は御多分の御茶代を……まことに行き届きませいで……早や……」

平馬は突立つたまま途方に暮れた。使命を帯びている身の油断はならぬ……が、志の趣意は、わかり切っている。最前の若者が謝礼心れいごころでしたに相違ないことを無下むげに退けるしりぞのも仰々ぎょうぎょうしい……といつてこれは亦また、何という念入りな計らい……年に似合わぬ不思議な気転……と思ううちに又しても異妖な前髪姿が、眼の前にチラ付いて来た。

「……どうぞ、ごゆるりと……ヘイ。まことに、むさくるしい処で御座いますが……」

と云ううちに亭主と女中さかが退つて行つた。

平馬は引込みが付かなくなった。そのまま床の前の緞子どんすの座布ざふ団だんにドツカと腰を下して、腕を組んでいると今度は、美しく身化みじ

粧ました高島田の娘が、銚ちようし子を捧げて這はい入いつて来た。

「……入いらせられませ。あの土地の品で、お口当りが如何と存じますか……お一つ……」

平馬は腕を組んだまま眼をパチパチさせた。

「お前は……女中か……」

「ハイ……あの当家の娘で御座います」

「ふうむ。娘か……」

「……ハイ。あの……お一つ……」

平馬は首をひねりひねり二三献こんほ干ほした。上酒と見えていつの間にか陶然となつた。

……ハテ。主命というても今度は、お部屋向きの甘たるい事ば

かりじや。附け狙われるような筋合いは一つもないが……やはり最前の若侍が真実からの礼心であろう……。

なぞと考えまわす中^{うち}に、元来屈託のない平馬は、いよいよ気安くなつて五六本を傾けた。鯉^{こい}の洗い、木の芽^{でんがく}田楽なども珍らしかつた。

沈み込む程ふっくりした夜具に潜り込む時、彼は又ちよつと考えた。

……これ程の心付けをするとあれば余程の路用を持っているに違いない。友川という旗元は、あまり聴かぬようじやがハテ。何石取であろう……。

と思ううちに又も、松原を背景にした若侍の面影が天井の火影^{ほかげ}

に浮かみ現われた。……水色の襟と、紺色の着物と、桐油合羽の黄色を襲^{かき}ね合わせた白い襟筋のなまめかしかつたこと……。

しかし、それも僅かの間^まのまぼろしであった。平馬はそのまま寝返りもせず^{いびき}に鼾をかき初めた。

箱根を越えるうちに平馬は、若侍の事をサツパリと忘れていた。

駿府にはわざと泊らず、海近い焼津から一気に大井川を越えて、
茶摘歌と揚雲雀^{あげひばり}の山道を見付^{みつけ}の宿まで来ると高い杉森の上に

三日月が出たので、通^{とお}筋^{すじ}の鳥居前、三五屋というのに草鞋^{わらじ}を

解いた。近くに何やら喧嘩があるという横路地の立話を、湯の中^{うち}で聞きながら旅らしい気持ちに浸っていたが、その中に気が付く

と一人の女中が板の間に這入つて来て、今まで着ていた木綿の浴衣を、絹らしいのと取換えている。……ハテ。何をするのか……と見ているとその女中が三指を突いて平馬の顔を見た。

「あの御客様……まことに申訳御座いませぬが只今、奥のお座敷が空きましたから、お上りになりましたらお手をどうぞ……御案内致しますから……」

小田原の出来事を思い出した平馬は返事が出来なかつた。何やらわからぬ疑いと、たまらない好奇心が眼の前で渦巻き初めたので、無言のまま湯気の中から飛び出した。

「ハイ……どうもお疲れ様で……お流し致しましょう」

揉み手をしながら小奇麗こぎれいな若衆が這入つて来た。新しい手拭浴

衣を端折はおっている。

「……ウーム……」

平馬は考え込んだまま背中を流さしたが、どうしても考えが纏まらなかつた。肩癖けんぺきを打つ若衆の手許が、妙に下腹にこたえた。

女中に案内されて奥へ来てみると、小田原ほど立派ではないが木の香かがプンプンしている二尺の間床に、小田原と同じ蝦夷菊えぞぎくが投入なげいれにしてある。落款らつかんは判からぬが円相えんそうを描いた茶掛ちやがけが新しい。その前に並べた酒袋しゅたいの座布団と、吉野春慶しゅんけいの平膳らぜんが旅籠はたごらしくなかつた。頭の天辺てっぺんに桃割ももわれを載せて、鼻の頭をチョット白くした小娘が、かしこまってお酌をした。済まし返つてハキハキと物云う小娘であつた。

「……ここは茶室か……」

「ハイ。このあいだ、清見寺せいけんの和尚様が見えました時に、主人が建てました」

平馬は床の間の掛物を振り返った。

「あの蝦夷菊はこの家の庭やに咲いたのか」

「いいえ。あの……お連れの奥方様が、お持ちになりました」

「……ナニ……奥方様……」

小娘は無邪気にうなずいた。

「フーム。どんな奥方様か……」

小娘はちよつと眼を丸くした。

「旦那様は御存じないので……」

「……ウムム……」

平馬は行き詰まった。知っていると云つて良いか悪いか見当が
付かなくなつたので……。

「……あの……黒い塗駕籠ぬりかごの中に紫色の被布ひふを召して、水晶のお
珠数じゆずを巻いた手であの花をお渡しになりました。挟はさ箱みばこ持った
人と、怖い顔のお侍とも様が一人お供しておりました」

「ウムム。不思議だ。わからぬな……」

「ホホホホホホ……」

小娘は声を立てて笑つた。冗談と思つたらしかつた。

「旦那様は鯉のお刺身と木の芽田楽が大層好きと、その御方おかたが
仰おっしゃ言しゃりました。それで兄あにさんが大急ぎで作りました」

平馬はモウ一度膳部を見廻したが、思わず赤面させられた。小田原で酔うた紛れに美味い美味いと云つて、無暗に頬張つた事を思い出させられたので……しかし……その中にフト青い顔になると、急に盃を置いて、小娘の顔を見た。

「……ちよつと主人を呼んでくれい」

「ハイ……」

と云ううちに小娘は爛瓶かんびんを置いて立上つた。ビックリしたらしくバタバタと出て行つた。

「……これはこれは……まだ御機嫌も伺いませいで……亭主の佐五郎奴めで御座ります。……何か女中が無調法でも……へへい……

……」

「イヤ。そのような話ではない。ま……ズツト寄りやれ。実は内密の話じゃがの……」

「へへ……左様で御座いましたか。へいへい……それに又、もうし申お遅くれましたが、先程は、お連れ様から、存じがけも御座いませぬ……」

「アハハ。実はそのお連れ様の事に就いて尋ねたいのじゃが……」
「へへへ……どのような事で……」

「その、お連れ様という奥方風の女は、どのような人相の女であつたろうか……」

「……へエツ。何と仰せられます」

「その御連様というた女の様子が聞きたいのじゃ」

「……これはこれは……旦那様は御存じないので……」

「おおき。身共はその女を知らぬのじゃ」

「……へエツ。これはしたり……」

主人が白髪頭を上げて眼を丸くした。六十余りと見える逞ましい大男であつた。投げ卸しおろ気味の鬚まげの恰好から、羽織さばの捌さき加減が、どこことなく一癖ありげに見える……。

平馬は思い出した。ここいらの宿屋の亭主には渡世人上りが多いという話を……。

平馬の想像は中あたつていた。

それから平馬が物語る一部始終を聞いているうちに老人は、両手をキッチンと膝に置いた貫かん碌ろくのある見構えに変わった。平馬の顔

の真正面に、黒い大きな眼玉を据えていたが、話が一通り済むと静かに眼を閉じて腕を組んだ。

「……迂濶うかつな事を致しましたのう。その奥方様に私が自身でお眼にかかつておりましたならば、何とか致しようも御座いましたらうものを……若い者の鳥渡ちよつとした出入でいりを納めに参いっております間に、飛んだ無調法を悴せがれめ奴が……」

「イヤ。無調法と申す程の事でもない……が……御子息というと……」

「へへ。最前お背中を流させました奴で……」

「ああ。左様か左様か。それは慮りよがい外致した」

「どう仕りました……飛んだ周章者うろたえもので御座います。御仁ごにんてい体を

も弁わきまえませず、御都合も伺かいませずに斯か様な事を取計とりらいまし
て……」

平馬は又も赤面させられた。

「アハハハ……その心配は無用じゃわい。すでに小田原でも一度
あつた事じゃからのう。つまるところ拙者の不覚じゃわい……」

「勿体のう御座りまする」

「……しかし供ともを連れた奥方姿というと話があまり違い過ぎるで
のう。世間慣れた御亭主に聞いたら様子が解りはせんかと思つて、
実は迷惑を頼んだのじゃが」

「恐れ入りまする。お言葉甲斐もない次第で御座りまするが、只
今のような不思議なお話を承りましたのは全くのところ、只今が

お初はつで御座ります。何をお隠し申しませう。私も以前は二足の草鞋わらじを穿きました馬鹿者で、ヘイ……この六十年の間には色々珍らしい世間も見聞きして参りましたが、それ程に御念の入りました狐狸きつねは、まだこの街道を通りませぬようで……」

「……ホホオ……初めてと申さるるか」

「左様で……表の帳場に座っておりまして、慣れて参りますと、お通りになります方々の御身分、御役柄、又は町人衆の商売は申すに及ばず、お江戸の御時勢、お国表の御動静ごようすまでも、荒あ方らかたの見当が附くもので御座いまするが……」

「成る程のう。そうあろうともそうあろうとも……」

「……なれども只今のような不思議な御方おかたが、この街道をお通り

になりました事は天一坊からこのかた以来、先ず在るまいと存じます
で……」

「うむうむ……殊に容易ならぬのはアノ足の早さじゃ。身共も十
五里十八里の道は日帰りする足じゃからのう……きようも焼津か
ら出て大井川で、したたか手間取ったのじゃが……」

佐五郎老人はちよつと眼を丸くした。

「……それは又お丈夫な事で……」

「まして女によしよう性とあれば通し駕籠に乗ったとしてもものう」

佐五郎は大きく点頭うなずいた。

「さればで御座りまする。貴方様のおみ足の上を越す者でなければ、お話のような芸当さばは捌けるもので御座いませぬが……とにか

く私がこれから出向きまして様子を探って参いりましょう。まだ左程、離れてはおるまいと存じますので……」

「ああコレコレ。そのような骨を老体に折らせては……分別してくるればそれでよいのじゃが……」

「ハハ。恐れ入りますが手前も昔取った杵柄……思い寄りも御座いますのでこの場はお任かせ下されませい。これから直ぐに

……」

「……それは……慮外千万じやのう……」

「……あ。それから今一つ大事な事が御座ります。念のために御伺い致しまするが、旦那様は、そのお若いお方の讐討の御免状を御覧になりましたか……それともその讐仇の生国名前な

んどを、お聞き及びになりましたか」

「いいや。それ迄もないと思うたけに見なんだが……」

「……いかにも……御ごもつと尤も様で、それでは鳥渡ちよつと一走り御免を

蒙りまして……」

「……気の毒千万……」

「どう仕りまして……飛んだお妨げを……」

老亭主の佐五郎はソクサと出て行つた。……と思う間もなく
最前の小娘が、別の爛瓶を持って這入つて来た。ピタリと平馬の
前に座ると相も変わらず甲かんだか高いハツキリした声を出した。

「熱いのお上りなさいませ」

平馬は何となく重荷を下したような気がした。

「おうおう待ちかねたぞ……ウムツ。これは熱い。……チト熱過ぎたぞ……ハハ……」

「御免なされませ……ホホ……」

「ところで今の主人はお前の父ととさんか」

「いいえ。叔父さんで御座います。どうぞ御ゆつくりと申して行きました」

「何……もう出て行ったのか」

「ハイ。早ようて二三日……遅うなれば一ひと月ぐらいかかると云うて出て行きました」

平馬は又も面喰らわせられた。

「ウム。それは容易ならぬ……タツタ今のま間に支度してか」

「ハイ。サゴヤ佐五郎は旅支度と早足なら誰にも負けぬと平生いっしょから自慢にしております」

「ウーム……」

しかし中国路に這入った平馬は又も、若侍の事をキレイに忘れていた。それというのも見付しゆくの宿以来、宿屋の御馳走がピッタリと中絶したせいでもあつたらう。序ついでにサゴヤ佐五郎の事も忘れてしまつて文字通り帰心矢の如く福岡に着いた。着くと直ぐに藩公へお眼通りして使命を果し、カタの如く面目を施した。

ところで平馬は早くから両親をなくした孤みなしご児同様の身の上であつた。百石取の安馬うま廻りの家を相続しているにはいたが、お

納戸なんど向きのお使つかいばん番ばんという小忙こせわしい役目やくめに逐おわれて、道中ちぎようしよばかりしていたので、榭ますごや小屋こやの小さな屋敷やしきも金作かねさくという知行ちぎようしよ所出しよの若党わかしやうと、その母親ははの後家ごけ婆ばあに任まかしていた。ところが今度の帰国きこくを幸あい、縁辺えんぺんの話わを決定ていぎんめたいという親類しんるいの意見いけんから、暫しばく役目やくめのお預ありを願ねがって、その空屋あきや同然どうぜんの古屋敷ふるやしきに落付おく事ことになると、賑にぎやかな霞かすみが関せきのお局つぼねや、気散きさんじな旅りよの空そらとは打うって変かった淋しみしさ不自由ふじゆうさが、今更いまさらのように身みに泌しみみ泌しみみとして来きた。さながらに井戸いどの中なかへ落込おんだような長閑のどかな春はるの日ひが涯はてしもなく続つき初はじめたので、流石さすがに無頓着むとんちやくの平馬へいばも少々少々閉口へいこうしたらしい。或あるる日ひのこと……思おもい出でしたように道具たうぎを荷かいで因幡いなば町ちやうの恩師おんし、浅川あさか一いち柳齋りやうさいの道場だうじやうへ出でかけた。

一柳斎は、むろん大喜びで久方振りの愛弟子まなでしに稽古を付けてくれたが、稽古が済むと一柳斎が、

「ホホオ。これは面白い。稽古が済んだら残っておりやれ。チト話があるでな」

と云う中うちに何かしらニコニコしながら道具を解いた。手酷しい稽古を付けてもらった平馬は息を切らして平伏した。これも大喜びで居残つて一柳斎の晩酌のお相手をした。

一柳斎は上々の機嫌で胡麻塩ごましおの総髪を撫で上げた。お合いをした平馬も真赤になっていた。

「コレ。平馬殿……手が上がったのう」

「ハッ。どう仕りました、暫くお稽古を離れますと、もう息が切

れまして……ハヤ……」

「いやいや。確かに竹刀しな離れがして来たぞ。もう平馬殿……お手前はじゆうこの中、どこかで人を斬られはせんじやつたか。イヤサ、真劍であの立会いをされたであろう」

平馬は無言のまま青くなつた。恩師の前に出ると小児こどものようにビクビクする彼であつた。

「ハハハ。凶星であろう。間合いと呼吸がスツクリ違うておるけにのう。隠いても詮ない事じや。その手柄話を聴かして下されい。ここまでの事じやから差し置かずにのう」

いつの間にか両手を支つかえていた平馬は、やつと血色を取返して微笑した。叱られるのではない事がわかるとホツと安堵さかずきして盆を

受けた。赤面しいしいポツポツと話出した。

ところが、そうした平馬の武骨な話しぶりを聞いている中うちに、柳斎の顔色が何となく曇つて来た。しまいには爛かんが冷さめても手もつかず、奥方が酌に来てても眼で追い払いながら、しきりに腕を組み初めた。そうして平馬が恐る恐る話を終ると同時に、如何にも思い迷つたらしい深い溜息を一つした。

「ふううむ。意外な話を聞くものじゃ」

「ハッ。私も実はこの不思議が解けずにおります。万一、私の不念ぶねんではなかったかと心得まして、まだ誰にも明かさずにおりまするが……」

「おおき。話いたらお手前の不覚になるところであつた」

「……ハツ……」

何かしらカーツと頭に上つて来るものを感じた平馬は又も両手を畳に支ついた。それを見ると一柳斎は急に顔色を柔らげて盃をさした。

「アハハ……イヤ叱るのではないがのう。つまるところお手前は
まだ若いし、拙者のこれまでの指南にも大きな手抜きがあつた
事になる」

「いや決して……万事、私の不覚……」

「ハハ。まあ急せかざと聞かれいと云うに……こう云えば最早もはやお解
かりじやろうが、武辺の嗜たしなみというものは、ただ弓矢、太刀筋ば
かりに限つたものではないけにのう……」

「……ハ……ハ……ハイ……」

「人間、人情の取々とりどりさまさま様々、世間風俗の移り変りまでも、

及ぶ限り心得ているのが又、大きな武辺のたしなみの一つじや。

それが正直一遍、忠義一途に世の中を貫いて行く武士のまことの

心がけじやまで……さもないと不忠不義の輩やからに欺されて一心、国

家を過あやまつような事になる。……もつともお手前の今度の過あやまち失は、

ほんの仮かり初そめの粗忽そこつぐらいのものじやが、それでもお手前のため

には何よりの薬じやつたぞ」

「……と仰せられますと……」

「まま。待たれい。それから先はわざと明かすまい。その中うちに解

かる折もあろうけに……とにも角にもその見付の宿の主人あるじサゴヤ

佐五郎とかいう老人は中々の心掛の者じゃ。年の功ばかりではない。仇討免状の事を貴殿に尋ねたところなどは正まさに、鬼神を驚かす眼識じゃわい」

「……と……仰せられますと……」

若い平馬の胸が口惜しさで一パイになって来た。それを色に出すまいとして、思わず唇を噛んだ。

「アハハハ。まあそう急がずと考えて見さつしやれ。アツサリ云うてはお手前の修行にならぬ。……もつともここの修行が出来上れば当流の皆伝を取らするがのう……」

「……エツ。あの……皆伝を……」

「ハハハ。今の門下で皆伝を許いた者はまだ一人もない。その仔わ

細^けが解^げかつたかの……」

平馬は締^{しめぎ}木^ぎにかけられたように固^{かた}くなってしまった。まだ何が何やらわからない慚^{ざんき}愧、後悔の冷汗が全身に流るるのを、どうする事も出来ないままうなだれた。

「……平馬殿……」

「……ハツ……」

「貴殿の御縁辺の話は、まだ決^{きま}定^まつておらぬげなが、程よいお話でも御座るかの……」

平馬は忽ち別の意味で真赤になった。……自分の周囲に縁談が殺到している……「娘一人に婿八人」とは正反対の目に会わされている……という事実を、今更のようにハツキリと思い出させら

れたからであつた。

「うむうむ。それならば尚更のことじゃ。念のために承つておくがのう。その今の話の美くしい若侍とか、又は見付の宿の奥方姿の女とかいうものが、万一、お手前を訪ねて来たとしたら……」

「エツ。尋ねて参りますか……ここまで……」

「おおさ。随分、来まいものでもない仔細がある。ところで万が一にもそのような人物が、貴殿を便たよつて来たとしたら、どう処置をさっしやるおつもりか貴殿は……」

「……サア……その時は……とりあえず以前の馳走ちそうの礼を述べまして……」

「アツハツハツハツハツハツ……」

一柳斎は後手うしろでを突いて伸び伸びと大笑した。

「アハアハ。いやそれでよいそれでよい。そこが貴殿の潔白なところじゃ。人間としては免許皆伝じゃ」

平馬は眼をパチパチさせて恩師の上機嫌な顔を見守った。何か知ら物足らぬような、馬鹿にされているような気持ちで……。しかし一柳斎はなおも天井を仰いで哄笑した。

「アハハハ……これは身どもが不念ぶねんじやつた。貴殿の行末を思う余りに、要らざる事を尋ねた。『予め搔あらかじいて痒かゆきを待つ』じやつた。アハアハアハ。コレコレ。酒を持って酒を……サア平馬殿一献けん重ねられい。不審顔をせずとも追ってわかる。貴殿ならば大丈夫じゃ。万が一にも不覚はあるまい」

平馬は南向の縁側へ机を持ち出して黒田家家譜を写していた。一柳斎から「世間識しらず」扱いにされた言葉の端々はしばしが気にかかつて、何となく稽古を怠けていたのであった。

その鼻の先の沓くつぬぎ脱石へ、鍬くわを荷いだ若党の金作がポカンとした顔付で手を突いた。

「……あの……申上げます」

「何じや金作……草取りか……」

「へエ……その……御門前に山笠やま人形のような若い衆が……参いました」

「……何……人形のような若衆……」

「へエ……その……刀を挿さいて見えました」

「……お名前は……」

「……へエ……その……友川……何とか……」

平馬は無言のまま筆を置いて立上った。今までの不思議さと不安さの全部を、一時に胸うちの中でドキンドキンと蘇おらせながら……。

ところが玄関に出てみると最初に見かけた通りの大前髪おおまえがみに水

色襟、紺こんきびら生平こくらはかまに白小倉袴、細身の大小の柄つかを内輪うちわに引寄せた

若侍が、人形のようにスツキリと立っていた。すこし日に焼けた横頬を朝の光に晒さらしながらニツコリとお辞儀をしたので、こちらも思わず顔を赤めて礼を返さない訳に行かなかつた。

……これ程に清らかな、人じんぴん品のいい若侍をどうして疑う気に

なつたのであろう……。

と自分の心を疑う気持ちにさえなつた。

「……これは又……どうして……」

「お久しゅう御座います」

若侍は美しく耳まで石竹色せきちくいろに染めて眼を輝やかした。

「イヤ。まずまずお話はあとから……こちらへ上り下されい。手前一人で御座る。遠慮は御無用。コレコレ金作金作。お洗足すすぎを上げぬか……サアサア穢むさくる苦しい処では御座るが……」

平馬は吾にもあらず歓待ほとめいた。

若侍は折目正しく座敷に通つて、一別以来の会釈をした。平馬も亦、今更のように赤面しいしい小田原と見付の宿の事を挨拶し

た。

「いや……実はその……あの時に折角の御厚情を、菅すげなく振切つて参いったので、その御返報かと心得まして、存分に讐かたき仇を討たれて差上げた次第で御座つたが……ハハハ……」

平馬は早くも打ち解けて笑つた。

しかし若侍は笑わなかつた。そのまま眩まぶしい縁側の植え込み
に眼を遣つたが、その眼には涙を一パイに溜めている様子であつた。

「……して御本懐をお遂げになりましたか」

「はい。それが……あの……」

と云ううちに若侍の眼から涙がハラハラとあふれ落ちた……と

思う間もなく畳の上に、両袖を重ねて突伏すと、声を忍んで咽び泣き初めた。……そのスンナリとした襟筋……柔らかい背中の丸味……腰のあたりの膨らみ……。

平馬は愕然となった。

……女だ……疑いもない女だ……。

と気付きながら何も彼も忘れて啞然となった。

……最初からどうして気付かなかったのであろう……恩師一柳斎の言葉はこの事であったか。あの時に、どう処置を執るかと尋ねられたが……これは又、何としたものであろう……。

と心の中で狼狽した。顔を撫でまわして茫然となった。

その平馬の前に白い手が動いて二通の手紙様の物をスルスルと

差出した。そのまま、拝むように一礼すると、又も咽むせびなき泣なきの聲が改まった。

平馬は何かしら胸を時めかせながら受取った。押し頂きながら上の一通を開いてみた。

ボロボロの唐紙半切とうしはんせつに見事な筆跡で、薄墨の走り書きがしてあつた。

遺言の事

一、父は不しの忍ぼずの某酒亭にて黒田藩の武士と時勢の事に就つき口論の上、多勢に一人にて重手負おもてい、無念ながら切腹し相果あいはつる者也。

一、父の子孫たる者は徳川の御為おんため、必ずこの仇あだを討うち果はたすべき者也。仮令たとい血統断絶致すとも苦しからざる事。

一、敵手あいての中の主おもだち立たる一人は黒田藩の指南番浅川一柳齋と名乗り、五十前後の長身にて、骨柄逞ましき武士なること。

一、後あとあと々の事は母方の縁辺により、御老中、久世くぜひろちか広周殿に御願申上べき事 以上。

友川三郎兵衛矩兼血判

嫡男 長一郎矩道代筆印

次男 三次郎矩行 印

文久二年五月十四日

又、別紙奉書の紙らいしには美事なお家様の文字が黒々と認したためてあつた。

別紙遺言状相添え、病弱の兄に代り、次男友川三次郎矩行、仇

討執心の趣、殊勝の事。但、御用繁多の折柄つぎに付、広周一存を以て諸国手形相添えさしゆるす。差許ものなり者也。尚本懐の上は父三郎兵衛の名みようぜき

跡 相違なかるべき事、広周可ふくみおくべきものなり含置者也

文久壬戌じんじゅつ二年六月二日 広周 書判

平馬の顔から血の色が消えた。何もかも解かったような気がすると同時に、又も、眼の前が真暗になつて来たので、吾れ知らず二通の手紙を握り締めた。自分の恩師を不倶戴天の仇あだと狙う眼の前の不思議な女性を睨み詰めた。

その時に若衆姿の女性が、やっと顔を上げた。平馬の凄じい血相を見上げると、又も新しい涙を流しながら唇を震わした。

「……御覧の……通りで御座います。兄も……弟もろうがい勞咳で臥せ

つております中にタツタ一人の妾が……聊か小太刀の心得が御座いますのを……よすがに致しまして、偽りの願書を差出しました。……そうして……そうして、お許しを受けますと……御免状の通り男の姿に変わりました……首尾よく箱根のお関所を越えました。それから他人様に疑われませぬように、色々と姿を変えまして、どうがな致してこの思いを、貴方様にだけ打ち明けたいと、心を砕きました甲斐もなく、関所破りの疑いをかけたらしい腕利きの老人に、どこからともなく付き纏われまして生きた空もなく逐おい廻おわされました時の、怖ろしゆう御座いましたこと……それから四国路まで狭さまよ迷よいまして、千辛万苦致しました末、ようようの思いで当地に立越えてみますれば……狙かたきうかたき讐かたき仇かたきの一柳斎は……

貴方様の御師匠さま……」

平馬をマトモに見上げた顔から、涙が止め度もなく流れ落ちた。その身内の戦おののかしよう……肩の波打たせようは、どう見ても真実こめた女性の、思い迫った姿に見えた。

平馬は地獄に落ちて行く亡者のような気持になった。乾いた両眼をカツと見開いて、遠い遠い涯てしもない空間を凝視していた。その眼の前に泣き濡れた、白い顔が迫って来た。噎むせかえる女性かわりの芳香と一所に……。

「……それで……それで……妾は……貴方様のお手に掛かりに……まいました」

ハツとした平馬は二尺ばかり飛び退のいた。

「……………ナ……………何と……………」

「……………妾は、父の怨みを棄てました、不孝な女で御座います。小田原の松原からこのかた、あ……………貴方様の事ばかり……………思い詰めてまして……………」

「……………エエツ……………」

「……………お……………お慕い申して参りました。討たれぬ……………討つては成りませぬ仇かたきとは存じながら……………ここまで参りました。せめて貴方様の……………お手にかかりたさに……………一と思いの……………御成敗が受けたさに……………受けとうて……………」

と云ううちにキツと唇を噛んだ若侍の姿がスルスルと後あとへ下がった。……………それは云い知れぬ思いに燃え立つ妖火のような頬の輝

やき、眼の光り……と見るうちに懐^{ふところ}中の^{あいくち}七首、抜く手も見せず、平馬の喉元へ突きかかった。

「……アツ。心得違い……めさるなツ」

危うく右へ飛び退^のいた平馬は、まだ居住^{いずまい}居を崩さずに両手を膝に置いていた。

「……乱心……乱心召されたかツ……^{かたき}讐仇は^{かたき}讐仇……身共は身共……」

と助けてやりたい一心で大喝した。

一方に空を突いた若侍姿はモウ前髪を振り乱していた。とても敵^{かな}わぬと観念したらしく、平馬の大喝^{もと}の下に息を切らしながら眼を閉じたが、又も思い切って見開くと、火のような瞳を閃めかし

た。

「……ヒ……卑怯者ツ。その讐仇かたきを討つのに……邪魔に……邪魔になるのは貴方一人……」

「……エエツ……さてはおのれ……」

「お覚悟ツ……」

という必死の叫びが、絹を裂くように庭先に流れた。白い光りが一直線に平馬の胸元へ飛んだが、床の間の脇差へかかった平馬の手の方が早かった。相手が立ち上りかけた肩先を斬り下げた。

その切きつ先さきに身を投げかけるようにして来た相手は、そのまま懐剣を取落して仰のけぞった。両手の指をシツカリと組み合わせた

まま、あおのけに倒おれると、膝頭をジリジリと引き縮めた。涙の浮かんだ眼で平馬を見上げながらニツコリと笑った。

「……本望……本望で……御座います。平馬様……」

そう云ううちに、袈裟けさがけに斬り放された生平きびらの襟元がパラリと開いた。赤い雲から覗いた満月のような乳房が、ブルブルとおのきながら現われた。

「……すみませぬ……濟みま……せぬ……。今までのことは、何もかも……何もかも……偽り……まことは妾わたくしは……女……女役者……」

と云いさして平馬の方向ほうへガツクリと顔を傾けた……が……しかし、それは苦痛のためらしかつた。そのまま眼を閉じてタツプ

りと血を吐いた。……と見るうちに下唇を深く噛んで、白い小さな腮あごを、ヒクリヒクリとシヤクリ上げはじめた。

平馬は血刀ひっさを掲げたまま茫然となっていた。

「……ええ。お頼み申します。お取次のお方はおいでになりませぬか。手前は見付の佐五郎と申す者で御座います。どなたかおいでになりませぬか。お頼み申しますお頼み申しますお頼み申します……」

という性急な案内の声を他所よそ事のよう聞いていた。

一柳斎は伸び伸びと肩を上げてうなずいた。

「いや。無事にお届が相済んで祝着この上もない……まずいっこん一献

……」

贗にせ侍斬りに就いて大目附へ出頭した紋服姿の石月平馬と、地味な木綿縞もめんじまに町の低い役袴やくばかまを穿いた三五屋、佐五郎老人が、帰り道に招かれて夕食の饗応もてなしを受けていた。大盆を傾けた一柳齋は早くも雄弁になっていた。

「……のう……一存の取計らいとはいう条、仮初かりそめにも老中の許し状を所持致しておる人間じゃ。無下むげに斬棄てたとあつては、無事に済む沙汰ではないがのう……お江戸の威光も地に墜ちかけている今日なればこそじゃ。それに又、佐五郎老体の言葉添えが、最初から立派であつたと云うからのう。番頭ばんがしらの筆頭が感心して話しおつたわい」

「どう仕りました……無調法ばかり……」

「いや。なかなかもつて……お関所破りの贋にせ若衆とあれば天下の御為に容易ならぬ曲くせもの者と存じ、当藩の役柄の者に付き纏うところを、ここまで逐おい詰めて参いったとあれば、大目附でも言句げんくはない筈じゃからのう……殊更に御老中の久世くぜひろちか広周殿も、お役御免の折柄ではあるし、迂濶な咎め立てをしようものなら却つて無調法な仇あだうち討免状が表沙汰になろうやら知れぬ。思えば平馬殿は都合のよい『生き胴』に取り当つたものじゃのう。ハツハツハツ……」

酌をしていた奥方が、心から感心したように平馬の顔を見てうなずいた。

「……あれからこの四五日と申しますもの、御城下では平馬殿のお噂ばかり……」

「うむうむ。そうあろうとも……イヤ。天晴あっぱれで御座ったぞ平馬殿。あの時に、どう処置をされるおつもりかと聞いたのはこの事じやったが……ハツハツ。よう見定めが附いたのう。佐五郎殿。そうは思われぬか……」

「御意ぎよいに御座います。先生様の御丹精たんせいといい、その場を立たせぬ御決断とお手の中うち……拝見致しながら夢のように存じました」

「うむうむ。然るにじや。あの女の正体を平馬殿の物語りの中から見破つて来た、佐五郎老体の眼鏡の高さも亦、中々もつて尋常でないわい。実はその手柄話を聞きたいが精神こころで、平馬殿に申し

含めて、斯かよう様に引止めさせた訳じやが……門弟共の心掛にもなる
でのう」

「身に余りまするお言葉、勿体のう存じまする。幅広う申上げま
する面目も御座りませぬが、初めて石月様のお物語を承っており
ますうちにアラカタ五つの不審が起りました」

「成る程……その不審というのは……」

「まず何よりも先に不審に存じましたのは、仇あだうち討に参いる程の

血気の若侍が、匂い袋を持っていたというお話で御座いました。

まことに似合わしからぬお話で……これは、もしや女にょにん人の肌の

香かをまぎらわせるためではないかと疑いながら承わっております
ると案の定、それから後のちの石月様の心遣いに、女ならでは行き届

きかねる節々が見えます……これが二つ……」

「尤も千万……それから……」

「三つにはその足の早さ……四つには、その並外れた金遣い、……それから五つにはその眼を驚かす姿の変りようで御座りまする」
 「いかにももう……恐ろしい理詰めじゃわい」

「ザツと右のような次第で、つまるところこれは稀代おんなしらなの女白浪みではあるまいか。さもなければお話のような気転、立働らきが出来る筈はないと存じ寄りましたのが初まりで……」

「うむうむ……」

「年寄の冷水とは存じましたが、御覧の通り最早もはや六十の峠を越え
 ました下り坂の私。空からぐるま車を引いている折柄で御座います、戻

り駄賃に一世一代の大物を引いて見ようか……と存じますと一気に釣り出された仕事で御座いましたが、タツタ一足の事で石月様に先手を打たれました……へへへ。面目次第も御座いませぬ」

「イヤイヤ。それにしても流石さすがは老練じや。並々の者に足跡を見せる女ではないわい」

「……とところでお言葉はお言葉と致しまして、ここに一つの不審が御座りまするが如何で御座りましょうか。御無礼とは存じますれど……」

「何の何の。何の遠慮が要ろう。何なりと存分に問うて見られい」

「へへい。有難う存じまする。それではお伺い申上げますが、

先生様が、石月様のお話から、あだうち仇討免状の正体カラクリを、お

覺さとりになりました次第と申しますは……」

「アハアハ。何事かと思うたればその事か。それなれば何でもない。他愛もない事じゃ」

「……と……仰せられますは……」

「うむ。追つてお尋ねを受ける事と思うが、実は身共も少々あの女に掛り合いがあつての」

「へエツ。これは亦、思いも寄りませぬ」

「ほかでもない。忘れもせぬ昨年うちの十月の末の事じゃ。久方振りに殿の御用で江戸表へ参うちいっておる中に、あの願書の当の本人、友川矩行という若侍から父の仇敵かたきと名乗り掛けられてのう……」

「へエツ。いよいよ以て不思議なお話……」

「おおき。しかも馬場先の晴れの場所で、助太刀らしい武士が二人引添うておつたが聊か肝を奪われたわい。面目ない話じやが聊か身に覚えのない事じやまで……」

「成る程……御尤も様で……」

「しかし迂濶に相手はならぬ。何か仔細がある事と思うたけに咄嗟の間に身を引きながら、如何にも身共は黒田藩の浅川一柳齋に相違ないが、何か拙者を讐仇と呼ばれる仔細が御座るか。然るべき仇討の免状でも持つておいでるかと問うてみたればそれは無い。在るには在つたが、浅草観世音の境内で懐中物と一所に掬られてしもうたと云うのじや」

「ハハア。どうやら様子がわかります」

「うむうむ。そこで……然らば、お気の毒ながら仇かたきよ呼ばわりは御免下されい。第一毛頭覚えのない事……と云い切つて立去りかけたところ、助太刀と共々三人が、抜き連れてかかりおつた。……然るにこの助太刀の二人というのが相当名のある佐幕派の浪人で、身共の顔を見識みしりおつて友川の手引をしたらしいと思われたが、事実、三人とも中々の者でう。最初は峰打ちと思つたが、次第にあしらいかねて来た故、若侍を最初に仇うち棄てて、返す刀に二人を倒おしたまま何事ものう引取つたものじゃ……しかし、それにしても若侍の事が何とのう不憫に存じた故、それから後のちに人の噂を聞かせてみたところが、何でも身共の姓名を騙かたつて飲食をしておつたどこかのナグレ浪人共が、別席で一杯傾けておつた

友川某なにがしという旗本に云い掛りを附けて討ち果いた上に、料理を踏倒おして逃げ失せおった。そこでその友川の枕元に馳付けた兄弟二人が、父の遺言を書取つて、仇討の願書を差出したものじやが、しかしその友川某という侍は兄弟二人切りしか子供を持っておらぬ。その中でも兄の方は、とりあえず家督を継ぐには継いだが、病弱で物にならぬ。その代り弟の方が千葉門下の免許取りであつたからそれに御免状が下がつた……というのが実説らしいのじや。不覚な免許取りが在つたものじやが、つまるところ、そこから間違いの仇あだうち討が初まつた訳じや……その第一の証拠には、その旗本が斬られたという五月の頃おい、拙者はまだこの福岡に在藩しておつたからのう……ハハハ。とんと話にならん話じやが……」

耳を傾けていた佐五郎老人はここで突然にパツタリと膝を打つた。晴れ晴れしく点頭うみなずいた

「ああ。それで漸々ようよう真相が解かりましたわい。実は私も見付の

在所で、お下りのお客様からそのお噂を承りまして聊いささか奇妙に存

じておりましたところと……と申しますのはほかでも御座いませ

ぬ。この節のお江戸の市中まちは毎日毎日斬きり捨すてばかりで格別珍らし

い事ではないと申しますのに、只今のお話だけが馬場先の返かえり

討うちと申しまして、江戸市中の大層な評判……」

「ほほう。それ程の評判じやったかのう」

「間違えば間違うもので御座います……何でもその友川という

若いお武家が、返り討うちに会うた会うた。無念無念と云うて息を引

取りましたそうで、その亡骸なきがらの紋所から友川様の御次男という事が判明わかりました。それに連れて二人の助太刀も、同じ門下の兄弟子二人と知れましたが、それにしてもその返り討うちにした片相手は何人なにびとであろう。助太刀共に三人共、相当の劍客と見えたのを、羽織も脱がぬ雪駄穿せつたばきのままあしろうて、やがて一刀の下に斬棄てたまま、悠々と立去る程の御仁のお名前が、江戸市中に聞こえておらぬ筈はないと申しましてな……」

「ハハハ。友川の兄御も、お役を退ひかれた久世殿もその名前を御存じではあつたらうが、何なにせい相手が霞が関の黒田藩となると事が容易でないからのう」

「御意の通りで御座います。……ところがここに又、左様な天下

の御威光を恐れぬ無法者が現われました……と申しますのは、その御免状を盗みましたすり掬摸の女親分で御座いまして、当時江戸お構いになつておりました旅役者上りの、外そとがま臺お久美と申しまする者が、その評判に割込んで参いましたそうで……」

「うむ。いよいよ真相しやうもくに近づいて来るのう」

「御意ぎよいに御座います。そのお久美と申しますは、まだ二十歳はたちかそこらの美形びけいと承りましたが、世にも珍らしい不敵者で、この評判を承りますると殊ことの外ほか氣きの毒がりました、お相手のお名前は妾わかしが存じております。キツト仇かたきを取って進ぜますという手紙を添えて、大枚の金子きんすを病身の兄御にことづけた……という事が又、もつぱらの大評判になりましたそうで……まことに早や、ど

「ここまで間違うて参りまするやら解からぬお話で御座いますが……」

「ハハハ。世間はそんな物かも知れんて……」

「しかし、いか程お江戸が広いと申しましても、それ程に酔狂な女づれが居りましようとは、夢にも存じ寄りませなんだが……」

「ウムウム。その事じゃその事じゃ。何を隠そう拙者も江戸表に

居る中うちにそのような評判を薄々うすうす耳に致しておるにはおつたがの

う。多分、そのような事を云い触らして名前を売りたいがっておる

のであろう。真逆まさか……と思ひながら打ち忘れておつたところへ平

馬殿の話を承つたものじゃから、実はビックリさせられてのう。

あんまり芝居が過ぎおるで……」

「御意に御座いまする。もつともあの女も最初は、まだ評判の広

がらぬ中に、御免状とお手形を使うて、関所を越えようという一心から、敵討かたきうちに扮装いでたつたもので御座いましょう。それから関西あたりへ出て何か大仕事をする了簡ではなかったかと、あの時に推量致しましたが……」

「いかにも——……ところが佐五郎どの程の器量人に逐おわれるとなると中々尋常では外はずされまい。事に依つたらこの方角へ逃げ込んで来まいものでもない。しかも当城下に足を入れたならば、何よりも先に平馬殿の処へ参いるのが定跡じょう……とあの時に思うだけに、一つ平馬殿の器量を試ためて見るつもりで、わざつと身共の潔白を披露せずにおいたものじゃつたが。いや……お手柄じゃつたお手柄じゃつた……」

「まことにお手際で御座いました」

「ハハハ……平馬殿はこう見えても武辺一点張りの男じやからのう……」

二人は口を極めて平馬を賞め上げながら盆さかずきを重ねた。酌をしていた奥方までも、たしなみを忘れて平馬の横顔に見惚みとれていた。

しかし平馬は苦笑いをするばかりであつた。燃え上るような眼まなこ なごし眸で斬りかかつて来た女の面影を、話の切れ目切れ目に思い浮かべているうちに酒の味もよく解らないまま一柳斎の邸を出た。

青澄んだ空を切抜いたように満月が冴えていた。

「……これが免許皆伝か……」

とつぶやきながら平馬は、黒い森に包まれた舞鶴城を仰いだ。

平馬の眼に涙が一パイ溜まった。その涙の中で月の下の白い天守閣がユラユラと傾いて崩れて行った。そうしてその代りに妖艶な若侍の姿が、スツキリと立ち現われるのを見た。……本望で御座います……と云い云い、わななき震えて、白くなって行く唇を見た。

堀端ほりばた伝たいに柵小屋ますの自宅に帰ると、平馬はコツソリと手廻りを片付けて旅支度を初めた。下男と雇やとい婆ばばの寢息うかがを覗うかがいながら屋敷を抜け出すと、門の扉とへピツタリと貼紙をした。

「啓上 石月平馬こと一旦、女賊風情の饗応を受け候そうろうううえ。上は、最早もはや武士に候わず。君公師父の御高恩に背き、身を晦くらまし申もうしそ。

候うろうあいだ間なにとぞ、何卒、御忘れおき賜わりたくそうろう度候。頓首うづ」

御用のため、江戸表へ急の旅立と偽って櫛形門を抜け、石堂川を渡つて、街道を東へ東へと急いだ平馬は、フト立止まつて空を仰いだ。松の梢こずえに月が流れ輝いて、星の光りを消していた。

平馬は大声をあげて泣きたい気持になった。そのまま唇を噛んで前後を見かわしたが、

「……ハテ……今頃はあの三五屋の老人が感付いて追っかけて来
 おるかも知れぬ。あの老人にかかつては面倒じゃが……そうじゃ
 ……今の中うちに引はずつ外はずしてくれよう。どこまで行つたとてこの思
 いが尽きるものではない……」

と独ひとりごと言を云い云い引返ひっかえして、箱崎松原の中に在る黒田家の菩提所、崇福寺の境内に忍び込んだ。門内の無縁塔の前に在る大きな拜おがみいし石の上にドツカリと座を占めた。静かに双肌もろはだくつろを寛げながら小刀の鞘を拵つった。

眼を閉じて今一度、若侍の姿を冥想した。

……おお……そもじを斬つたのはこの平馬ではなかつたぞ。世せ間けんてい体の武士道……人間のまごころを知らぬ武士道……鳥獸の争いをそのままの武士道……功名手柄一点張りの、あやまつた武士道であつたぞ。……そもじのお蔭で平馬はようように真実まことの武士道がわかつた……人間世界がわかつたわい。

……平馬の生命いのちはそもじに参いらする。思い残す事はない……

南無
……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：篠原陽子

2001年4月7日公開

2006年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

斬られたさに

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>